

講演会『弥生・古墳集落とモノ作り』討論の記録

(若林)

どうも、ありがとうございます。パネラーは三人しかおられませんので、討論というよりは補足とお二人の話を少し膨らませた感じで議論を進められればなと思っております。30分もない時間ですので、うまく進めていきたいと思っております。私の趣旨説明があった後にお二人の話を聞いた時に、いかに大きな枠組みでだけの趣旨説明として私の話があって、お二人の話がそれぞれの分野で非常に細部というものにこだわったものであるかっていうことは、何となく感じただけたんじゃないかなというふうに思います。真鍋さんの話は、技術的なこだわりということだと思います。古川さんの話は、社会的なこだわりと言うふうに理解してもいいのではないかな、というふうに私自身は思っています。まずは、技術的な話から先にしていきたいなと思っております。主に真鍋さんに少し伺ってみたいのですが、最初のビデオで立派な、交野で復元実験をされた例、それから海外での事例というもののビデオ、動画を見せていただきましたけれども、それぞれやり方はいろいろ違うんですけども、それぞれの炉とか製錬と铸造と鍛冶ですね、その三種類を見たんですね。それぞれああいう行為をした時に遺跡の中で炉の状態として、どういうふうにして遺跡の中で残るものなのか、あるいは残らないものなのかということをちょっと教えていただけますでしょうか。

(真鍋)

今ですね、若林先生の方から鉄・銅の製錬炉、それと铸造炉、それと鍛冶炉について遺跡での炉の痕跡の残り具合はどうなのかという質問だったと思います。まずは製鉄の日本での開始は古墳時代後期です。操業後に製鉄炉の炉底に滓が残る場合があります。私は以前、この炉底滓を鋤押し・銚押し・操業の失敗三つに分類できることを製鉄実験の結果から紹介しました。

次に铸造炉の痕跡ですが、近畿地方では和歌山県の堅田遺跡や奈良県の唐古・鍵遺跡ぐらいしか、弥生時代・古墳時代ともに残っていませんし、また推定する铸造作業の復元案、高杯を坩堝としたのかそれとも取鍋としたのかの理解も異なっています。痕跡は極めて不明瞭といえます。

それと三番目の鍛冶炉ですが、弥生時代の鍛冶炉というのは非常に被熱痕だけあって、炉の窪みもありません。西京極遺跡の地下構造のある鍛冶炉は特別であります。一般的には、皮鞆を持ってきて、どこでも鍛冶を出来たのではないかなと推定されています。それほど高温にする必要もなかったので、800~900°Cくらいで赤めてただ叩くだけで、弥生時代の実状ではなかったかと思っております。

それが前期、古墳時代に入りまして纏向遺跡やその辺りで羽口を使用した鍛冶が始まると1000°Cを超える作業となりますので、様々な痕跡を残します。中期に入っては、地上式鍛冶炉が導入されるため、鉄滓や羽口は多数出土するのですが、炉の痕跡が残りません。奈良県の南郷遺跡、布留遺跡では実は鍛冶炉は一基も見つかっていません。しかし同じ時期、関東・東北や南九州に行きますと、鉄滓や羽口が出たらほぼ鍛冶炉は見つかります。

韓半島の方から畿内地域にはたくさんの渡来人がやってきたと文献に記されていますが、愛媛大学の村上先生が言う立位スタイルを取り入れ、地上式鍛冶炉となったため、鍛冶炉が遺構として見つからないのだと思います。

(若林)

はい、ありがとうございます。ということは、一番最後の話ですけども、古墳時代、特に中期を中心に広まっていく、多分立って作業していたであろう、つまり、炉が凹みとして地面より下に出てこない、地面の上に炉を作るのでそういう鍛冶炉の痕跡が地表面より下にあらわれないタイプの炉を使っていたのは、近畿地方を中心とした地域ということになりますね。それ以外の地域は立位にしていなので、地下式炉・半地下式炉が見える。では、そのやり方が違うということは分かるんですけども、立位でやるのと座ってやるのとで、作れる製品とか技術というか、作りたいもの、あるいは工程素材、そういうものの違い、そういう関係ってあるんでしょうか。

(真鍋)

炉が高いところなのか低いところなのかの違いですので、なかなか難しい質問です。倭人を含む東夷諸族は地べたに座りたがり、これに対して騎馬民族などの北方の人たちは立位での鍛冶作業がやりやすいスタイルだったようです。そのため、古墳時代中期の馬具製作にはこの立位スタイルが採用されたと思います。また中期にはようやく精錬鍛冶から長剣・長刀の製作を行うことが列島内で可能となりますが、折り返し鍛錬や焼き入れなど微妙な羽口コントロールが、要求される高度な技術も必要でありました。この技術は渡来系鍛冶工がもたらしたものでしょうから、こちらも立位スタイルだった可能性があります。

南方に目を向けますと、沖縄から東南アジアとかもみんな座る平座位タイプです。しかし中国側に入ると鍛冶スタイルが立位スタイルに変わります。そのような癖といいますか、やりやすいのは平座位作業であると、それは南北の違いじゃないかなというようなことで村上先生の指摘を通じて理解しております。

(若林)

純粋に習俗の差ということになって、逆に言うと、今日趣旨説明でも出ましたし、古川さんの古墳と集落の分析で指摘されたこととの関係で話を進めたいと思います。古墳時代中期はすごく変わることについてはどういう意味があるのでしょうか。もちろん、鍛冶生産もそうですけど、そのときに地上式の立位でやる作業なんていうのは本当に誰がその変化をもたらしたかという問題にかかわるでしょう。何を作りたいからという機能的な問題ではなくて、そういう技術の経緯、技術伝播の経緯の問題として本当に説明できると考えていいのでしょうか。

(真鍋)

私はそれでいいと思います。飛鳥時代に入りますと、やはり鍛冶工人は立位作業を止めてしまいます。非常にやりにくかったのでしょう。飛鳥時代になると畿内地域の鍛冶遺跡でも鍛冶炉が見つかっていますので、本当に古墳時代中期から後期にかけての一時だけが地上式鍛冶炉を用いるという、それまでと違う習俗といいますか技術が入ったと理解しております。

(若林)

ということは、直接的にそれをしていた半島や中国、東北というか北東というか、そこあたりの技術を持った人でないか、直接来ないと、その技術変化はないというふうに鉄器生産を研究している人たちはほぼ皆考えているということではないでしょうか。

(真鍋)

鍛冶技術が韓半島からやってきた渡来人によるものだとということで共通認識にはなっていると思います。しかし私は彼らの故地を文献史料のとおり現在の北朝鮮にあった楽浪郡や帯方郡にいた中国系の「漢人」だと考えているのですが、そのことが共通認識とはなっていません。

(若林)

そうするとですね、非常に大きい社会変化の中で大きい問題なんですけど、一番初期のころは渡来人しか担えないというふうな解釈さえ可能になってくるわけですね。もちろん作業として、している人がいれば、倭人がそれを真似るといふときに同じ工程であるということは勿論あるので、そうしているから全員が渡来人かどうかわからないけど、当然そういう人がいないと、もうそういう技術にはならないということですね。そうすると真鍋さんが追いかけておられるような森遺跡も渡来人が来て操業しているということですね。また、古い段階では、奈良盆地の纏向遺跡でもそういうものが出てくるといふこと、それは古墳時代前期の段階でというふうに思いますけれども、そういうところには、もう渡来人が来ていると、つまり、間接的な技術伝播ではもうないというふうに言ってよいということなんでしょうか。

(真鍋)

纏向遺跡で使用した羽口は断面が蒲鉾型です。韓半島でも東海岸側、昔でいいますと「魏志倭人伝」にも出てくる「濊(ワイ)」とかいう地域にあたりますが、そちらの鍛冶羽口とよく似ています。ここでは鍛冶炉が見つかっています。また、福岡市の博多遺跡でも蒲鉾型の羽口は出土しています。纏向遺跡や博多遺跡ではまだ炉の痕跡などはまだ見つかってないのですが、おそらくは倭人を含む東夷諸族はもともと座位作業が共通する鍛冶スタイルじゃなかったのかなと思います。

次の古墳時代中期は畿内地域では韓国でも金海など韓半島東南部に近い羽口を採用します。当時このあたりは「加羅」と呼ばれ、「魏志倭人伝」では「弁韓」と呼ばれた地域です。纏向段階と羽口の

形状も異なっていますし、炉も地上式を採用しています。

流通の経緯や、形状が類似した理由などよくわかっていないのですが、畿内地域に入ってくる鍛冶のルーツにも韓国でも異なった地域からの、第一波、第二波、第三波と複数回の渡来の波があったのではないのでしょうか。このことは同志社大学考古学シリーズⅪで紹介させていただきました。

(若林)

はい、わかりました。では、地上式炉が増える古墳中期は渡来人だし、結局それは、彼らが来たいかどうかというレベルの問題ではなくて、誰かがそれを受け入れる、あるいはそこに住まわせる、誰かにその作業をさせるということがなければ起こらない変化ということでしょうかね。

(真鍋)

はい、そうだと思います。

(若林)

それは、よく言われるように中央の王権の介在なしにはできないと考えているのでしょうか。それとも近畿地方でということであれば、ある程度そういうこと起こっているのに、例えば奈良盆地でしかないとか、河内平野でしかないとか、そういうものでもないとしたら、どちらで考えた方がいいでしょう。ある程度の広いゾーンでおこなわれているのか、それともある集団が差配してそれを行っているように見えるのか、これは鍛冶炉からだけではわからないことだと思うんですけども、朝鮮半島や中国での技術のあり方、を考えた時に、鉄器研究者はそういうに考えているのでしょうか。

(真鍋)

当時の最高・最新の技術を集めた刀剣を参考に申しますと、纏向遺跡の鍛冶に関しては、黒塚古墳を始めとする前期古墳の刀剣と関係すると思いますが、精錬鍛冶からすべての工程を行ったとは小ぶりの鉄滓からみて考えられません。纏向遺跡では、棒状のものを持って来て、そこで叩き延ばす、そのぐらいの鍛冶作業は可能だったと思いますし、最終工程だけはやはり王権主導で行われていたのではないかなと思います。纏向遺跡では大型砥石もたくさん出ておりまして、鍛冶操業の後の研ぎという工程も刀剣には必要です。王権が鍛冶師や研ぎ師さらには鞆師も一括に掌握して、刀剣を各地に配布していたのではないかなと思います。

(若林)

古墳時代前期の段階は、そういうふうに一所でしかできなくて、それが配布されている。だけど、今日メインで扱う古墳中期というのは、それをそれぞれの地域でやり始めるというふうに理解をすることができるということで、それにはそれぞれのところにどれだけの人たちが介在しないと出来ないということですね。

(真鍋)

そうですね。中期になりますと畿内各地で刀剣製作が開始されます。それはやはり畿内地域でも有力な豪族が関与したと思います。特に有名な遺跡は布留遺跡で、鍛冶関連遺物と一緒に刀剣装具が出土しています。近くに石上神社があり、物部氏との関係が指摘されています。南郷遺跡でも刀剣装具が出土していますが、この遺跡は葛城襲津彦が渡来人を連れてきたという伝承があります。中期になりますと、王権直轄だけでなく有力な豪族も鍛冶集団を掌握していくようです。馬具製作も同様であったと思います。

(若林)

はい、ありがとうございます。王権の話はしたくないと私は初めに言ったのに結局そういう話になってしまってるわけですが。では、ちょっと話を変えまして、今度は古川さんの方にうかがいたと思います。古墳時代の初頭と言いますか、そこは弥生時代の後期とそんなに集落のあり方って変わらないんだということですよ。むしろ、ちゃんとした前方後円墳とか前方後方墳が現れてから、それを追うように、それに刺激されるようにあとから変わっていくっていう話があったと思います。これは非常に興味深い指摘だというふうに思います。実際に古墳時代の初頭の時に、奈良盆地では大規模古墳が出来てきている可能性が高い、しかし、まだこの地域ではない、もしくは最初のものを作ったところであるという状態のときというのは、基本的にそのムラには階層性がないという話でしたが、じゃ逆に言うと、それから変わっていく集落の間に階層があるというのはどういう状態でしょうか。考古学ではお墓で階層を見てきたと思うんですね。集落に階層があるというのは、一体、実態としてどういうことなんでしょうか。その階層の高い集落の人が皆、階層の低い集落の人を支配しているということなのか、あるいは、集落の間の階層って一体どういう意味を持って考えればいいのかと考えておられるか、ということなんですけども。ちょっと難しい問題かもしれません。

(古川)

そうですね、まずお墓をつくる集落が減っていくという流れがあると思っています。答えが微妙にずれてるので申し訳ないんですけども、弥生時代後期はだいたいどの集落も方形周溝墓というお墓を作っています。前に橿原考古学研究所付属博物館で方形周溝墓の展示があり、方形周溝墓の木棺が展示されていました。展示を見学して実感しましたけれど、方形周溝墓には副葬品はそんなにいっぱい入っていませんが、遺体を納める木棺を作るだけでも、大木を切って遠距離を運搬し、さらに加工して木棺を製作します。方形周溝墓を作るためにはかなり労力を費やし、自然資源も消費するのです。

すなわち方形周溝墓が減っていくということは、社会全体にその分の余剰が生じるわけです。余剰を生じさせるために方形周溝墓が減ったのか、あるいは方形周溝墓が減った結果として余剰が生じたのか、鶏が先か卵が先かというのはありますが、その余剰をつぎ込んで古墳ができたのではないだろうか。古墳時代になると、前方後円墳などの大型古墳はもちろんですが、小型の方墳にも銅鏡が副葬される事例があります。副葬品がより豪華になっていくことを考慮すると、均質な方形周溝墓を多く作るの

ではなく、一つあたりの墓に対して労力や経済力を前の時代より投入し、少量の墓を作るという、そんな社会に推移していくのではないかと、思っています。弥生時代から古墳時代にかけての変化は、より後の時期の古墳時代前期から中期への大きな変化に比べると小さいと思います。集落の様相からおそらく人口はさほど増えていません。真鍋さんの金属器研究でも、技術的な革新は弥生時代から古墳時代にかけてより、古墳時代前期から中期の方が大きい、ということですので、労働力や道具などの資源は弥生時代と大きく変わらないでしょう。その限られた資源を、前方後円墳や小型方墳などの、それまで方形周溝墓を作っていた人々よりも上位の人のお墓に投入する、そんな社会になっていくんだろうと思います。もしかすると、方形周溝墓を作れなくなった、より下位の階層の人々からの取奪というのも同時にあったのかもしれない。そんな印象を持っています。

(若林)

初めから大きいところを聞いてしまって申し訳ないと思います。ちょっと個別のことを聞きたいと思っていたので、少し古川さんへの質問を細かいところへ戻したいと思います。古墳時代の初めに大規模な墳墓を作るのもあるけれども、小規模な墳墓を持つムラもあるということでしたけど、そこで見られる先ほど方形周溝墓的なものとおっしゃいましたが、それは弥生時代の方形周溝墓と同じようなものなののでしょうか、それとも、やっぱりそれは古墳時代になると違う状態のものと考えた方がよろしいのでしょうか。

(古川)

そうですね。まず、山城地域では古墳時代初頭まで、特に階層差なく各集落で方形周溝墓が作られているので、古墳時代初頭は弥生時代から大きくは変わっていないだろうな、というふうに思っています。ちょっと難しいのがですね、自分で発表しておいてなんですが、古墳時代前期になってからの方形周溝墓、小型方墳をどう理解するかと言う問題があって、これに関しては実は古墳時代研究者でも意見は相当分かれていると思います。大阪大学名誉教授の都出比呂志先生は、前方後円墳を頂点とする社会の階層化があって、そして、その一番下の所に土坑墓があって、その一つ上に方形周溝墓、すなわち小型方墳があると考えられました。立命館大学名誉教授の和田晴吾先生は、古墳時代の小型方墳は弥生時代の方形周溝墓からの継続であって、古墳時代の首長層の秩序とは別ではないかと考えておられます。私は、古墳時代前期については、現状では都出先生の意見に近い立場です。社会階層の中で、大型古墳を作った人たちに次ぐ階層の人たちのお墓ではないかと考えています。

(若林)

ありがとうございます。ここに弥生のお墓のことを担当した藤井整さんがいれば、その比較が出来たというふうに思うんですけど。ただ、藤井さんの研究の中で、弥生時代には、私がモデルとしたようにムラのすぐ傍らにあるお墓もあれば、そうでないものもあるようです。方形周溝墓群がたくさんあるんですが、その墓群の分析からも複数のグループによって、墓地っていうのが作られているんじ

ゃないか。そのグループっていうのは一カ所に住んでいるものだけではなくて、いくつか別のところに住んでるということも考えなければいけないということが私共の共同研究で成果としてでてきました。そういう構造と比べて、古墳前期の初頭にある墓地、小規模の墓地というのは、それぞれも大きく変わりが無いと考えるべきか。あるいは、古墳前期の小規模墳墓についてはいかがでしょうか。

(古川)

共同研究報告書でもその問題を考えてみたところがあって、さっきの発言は少し言葉足らずでしたが、弥生時代から古墳時代にかけては、ある意味、引き算的な感じで、それまでお墓を各集落でまんべんなく作っていたのに、そうした弥生時代的なスタイルが継続できる集団とできなくなってしまいう集団に分かれるんじゃないかと思っています。当時の社会を構成している人たちがどういうふうを考えていたかはわからないですけども、従来の墓づくりを弥生時代後期末から古墳時代前期まで継続できるような集団にとっては弥生時代の続きであるかもしれないし、逆に弥生時代後期から古墳時代前期にかけてお墓をつくることをしなくなった、それは許されなくなったのか、するのをやめたのかはよくわからないですけど、そういう集団にとっては弥生時代から古墳時代というのは明らかに変わったんだということは言えるかなと思っています。

(若林)

わかりました。大変分かり良い説明かなと。全体として違うとかではなくて、弥生時代のようにいられる集団といられない集団という問題として古墳時代を捉えるということで、それはとても面白い説明だなというふうに思います。ちょっとフロアの方に振りたいと思うんですが、古川さんは桂川右岸のところ、古墳時代の初頭になると川沿いの低地のところに遺跡が増えてくるんだということを仰られました。実は、そのあたりの遺跡の分布の動態については、今日ここにいらっしゃる、京都大学の伊藤淳史さんも言及されておられまして、どこにあるかということだけではなくて、どういう構造の遺跡群かということについても言及されておられると思います。伊藤さん、そのあたりの古墳時代の始まりの辺り、今のお墓のことに絡める必要なくて、古川さんはルートに沿うんじゃないかという提案をされているんですけど、あるいは、そういうことは言えそうか、あるいは別のことを考えてみた方が面白そうか、ということについて何かコメントがあればありがたいですが。

(伊藤)*

こんにちは、伊藤です。ちょっと忘れてしまっている部分もあるのですが、非常に精緻な図式を作られた古川さんのお話をとても興味深く聞き、現象としてはそうなのかなと思いました。私自身は、弥生の方から追いかけて古墳の始まりくらいまでのことしか調べておらず、その時の関心は、都出比呂志さんの図式、つまり農業共同体というものの首長が成長して古墳の首長になるという図式です。そのまま図式通りいくと、弥生時代の集落の中で生まれてきた小首長が、古墳前期に首長墳を作ることになる。そうであるならば、本拠地になっている集落との対応がわかるのかな、という検証を、弥生

*伊藤淳史氏（京都大学文化財総合研究センター助教）

から古墳のはじまりまでの時間幅のなかで遺跡や集落の動態から考えてきたのが私になります。古川さんは、その部分も含めて、古墳時代全体の動きという幅で、検証されたというふうに、今理解しました。それで、逆に質問となってしまうのですが、古墳前期の集落、特に布留式の集落は確かに低地の方にまとまってくるかなという気はするのですが、そういう集落同士で差異が出てきたときに、ルートとの関連も指摘されましたが、全部が低地になってしまっている中で、生産に適しているところとそうでないところ、あるいは、先程は余剰のあるなしがあるのではないかという話もありましたが、諸集落の中で、小規模墳墓を築き得る集落とそうでない集落があるというような事態を認定する、ということでしょうか。そして、そうであるならばその原因は、生産力に起因しているものなのか、あるいは他のネットワーク的なものに拠るものなのか、どちらを考えられるのでしょうか。そのあたり、裏付けとなることも含めて伺いたいと思いました。私が聞かれているのに逆に質問して申し訳ないのですが、古川さん的にはその辺をどういうふうに考えてられるのかな、と。つまり、このように現象として集落のカテゴリーに違いが生まれてくる場合、それ以外の質的な部分ですね、先程若林さんが言及されたのと近いのかもしれないのですが、今言ったような生産力に起因しているのか、あるいはネットワークのようなものが理由なのか、やはり突き詰めて考える必要があるだろうと思うのです。実は私自身は、どちらかというところ、古川さんが描かれた程度にまで山城地域の古墳時代集落にあまり差は生じていなくて、むしろ、弥生後期からずっと散村、というか散住的状況が継続しているイメージも持っているのですが、そのあたりの集落をこうしてカテゴリーに分けられている古川さんに、では質的な差異がどの程度あるものなののでしょうか、ということをお教えいただきたいなと思っています。すみません、逆の質問で。

(古川)

まず、伊藤さんのお話にもあったように、私は新しい古墳時代から古い弥生時代を見てるし、伊藤さんは古い弥生時代から新しい古墳時代を見て、その問題意識はちょうどクロスしているもので、それがすごく面白いなと思って他人事のように聞いてしまいました。まず、古墳時代を迎えるに当たって、地域社会はあまり変わっていない、少なくとも変わったようには見えない、と発表では言いましたけれども、補足をしますと、弥生時代後期後半の段階になって、それまで全く集落がないのに突然出てくる集落があります。向日市の中海道遺跡や、京都市の植物園北遺跡ですが、すごく異質だし、中海道遺跡はその後、発展してすぐ近くに初期の前方後円墳を作るようになります。後付けの論理からいうと、中海道遺跡とは、その座につくことが約束された集落だと言えなくもないですが、フェアに比較すると、そんなに他の集落との差は正直無いと思っています。

すみません、答えになってるか分からないんですが、それと、もう一つ、古墳時代前期初頭についてなぜネットワークにある意味固執するのかと言いますと、地域社会がさほど発展していないのに、古墳をつくるようになるわけです。その理由をどこに求めるかというところ外に求めないと仕方がない。外ってどこなのかというところ、今回は王権の話はしないことになっていますが、非常に古い古墳である五塚原古墳が作られて、箸墓古墳と墳形が近いということから、どうしても、そちら方面に理由を

求めざるを得ないのではないか、と考えています。ただ古墳を作ろうという動きはあるけれど、それに対して山城地域の社会全体がすぐに反応してるのかと言うと、反応できていない状態だと思っています。五塚原古墳という山城地域で最初の古墳が作られた少し後の段階になって、山城地域の各地でも、各首長が古墳を作るようになると、おそらく山城地域の社会全体も、社会が変わってしまったことを認識して、何か変な言い方ですけど、それに応じて変わっていくのではないかと。「墓というのは実は重要なステータスを示すものなんだ」と地域社会が認識するようになる。そして、その古墳の近くには墓域を有する集落が立地するようになると思っています。小型方墳にも少し良い副葬品が入るので、貴重品を入手できるような階層性の高さは、ある程度はあるのではないのか、と思います。しかし、残念ながらお答えにはなっていませんが、墓をとっぴらった目線で見ると何が違うのとなると、正直難しいというのが今の私の研究の現状で、もっと何か知恵は出したいなと思っています。

(若林)

少し難しいと思われる方もいるかもしれませんが、浮かび上がってきた問題があるような気がします。古川さんもしっかり説明されたので、発表でも内容でわかると思うのですが、古墳中期がすごく違うということです。本当に古墳を造る集団が、大規模古墳を造る集団が、その古墳の近くにいないかどうかは別として、そういうことも考えられるぐらいの状態になっている。しかも、技術もものすごく変わる。そのことは、古墳時代中期にあらゆる面で画期があるということは、いろんな方法で論証することはできるんですが、そうすると浮かび上がってくるのは、古墳があるけどそういう状態ではないという古墳前期というものは、ますますわからないものになっていくということなんですよ。古墳時代中期的なものというのは非常によく分かるんですね、技術もチカラもネットワークも全部あると。人と、グループと大きなお墓という関係自身が変わってくるといえそうです。だけど、古墳時代前期には、大きな古墳があるのにしかも、私の方の扱った淀川流域などでは、それぞれの流域における古い古墳があるという状態なのに、実際には社会弥生時代からそんなに変わっていないように見えるということなんですよ。これは実は私達で、今三人で話してたことで急に思いついたことではなくて、同じ議論古代学研究会のシンポジウム（2014年12月）でやった時も結局そこに議論は至ったということなんです。

私たちの目的は、はじめは古墳時代中期の問題だったんですが、それが実は違う問題になっていっているということになります。問題の周囲をあぶり出してここに問題があるということだけがわかってきているという状態のような気はします。その点は我々がやってもまだ結論が出ていないんですけども、逆にはっきりしてきた問題かなという感じはします。という形で私の方で少しまとめてしまったような形になるんですけども、こういう議論になってきているということ、そうするとますますですが、どうして大きな古墳があるのかということはますます不思議なことになってきてしまうことだというふうに考えています。古代学研究会で話しあったときには、社会の状態はそんなふうじゃないんだけど特定のエリート層がそういうことを意図的にやっているというふうなことを議論までされるような状態になってきているということ、今そういう状態だということがはっきりしてきてる

んじゃないかなというふうに思います。加えて、立命館大学の長友朋子さんにちょっと伺いたいことがあります。そんな大きな話をした挙句にまた小さな話に戻るのかっていうことなんですが、そうすると京都では久津川車塚古墳とかその古墳群が非常に古墳時代中期で有名で大規模なんですけども、古川さんの古墳時代中期の話とも重なるんですが、その近くにそういう墓を造ったと思われるグループっていうのは、ちゃんと見つけることは出来るんでしょうか。久津川古墳群の発掘調査をされている長友さんとしてはいかがでしょうか。

(長友)

立命館大学の長友です。大変興味深く拝聴させていただきました。質問としましては、久津川古墳の周りにそのような集落群がということによろしいでしょうか。

(若林)

そうです。前期と全然違うっていうふうに言えるのか、それとも古墳の横にやっぱりそういうグループがいるっていうふうに言えるのかということですね。

(長友)*

実は、そのあたりが大変興味深くて、今日拝聴しに来た次第です。古川さんの発表では、芝山古墳群と梅の子塚、それから森山遺跡との関係性ということについても述べられ、この三つの遺跡を集落と古墳のセット関係というふうに捉えてお話されました。実は、久津川車塚古墳の造り出し部を昨年度まで調査しており、造り出しの中で土器を使って祭祀儀礼をしていたということが分かってきました。造り出しで土師器がたくさん出てきましたので、近年確立されつつある土師器編年研究をふまえて少し検討してみました。同時に、森山遺跡の方形区画から出ている土器についても観察しましたところ、同じような作り方や形のもものが結構たくさんありまして、時期的に同時期でとらえてもいいんじゃないかという見解を持ったんですね。久津川車塚古墳は、南山城最大の中期古墳ですので、その被葬者は相応の規模の拠点地で活動していたと推定されます。そうであるならば、森山遺跡の方形区画が最も適当だと思われれます。ですので、古川さん自身も仰っていましたが、古墳が大きくなる、権力が大きくなるというのは、支配領域が広がるということとも関連してくるんだというお話がありましたように、集落と墓の関係を捉える時にも、この森山遺跡と関連する古墳はすぐ近くの梅の子塚、芝山古墳という範囲だけではなくて、もう少し広く久津川車塚古墳群も含めて考えてもいいのではないかというのが、今、私の考えているところであります。まだ調査も途中ですので、これから検討していきたいと思いますが、集落に近い古墳が関連するととらえるのが、一見堅実な考えのようですけれども、少なくとも古墳時代中期になりますとやはり弥生時代の集落と墓の関係とは違って、もっと広いエリアで検討するということが必要になるのではないかというふうに考えております。

*長友朋子氏（立命館大学文学部教授）

(若林)

ありがとうございました。やっぱり弥生と古墳のやり方は変わってきてしまうということだというふうに思います。だいたい時間となってきましたので、弥生時代古墳時代の研究に精通していらっしゃる森岡秀人さんがちょっと来られてますので、最後にという形で我々の議論を含めてコメント頂ければありがたいなというふうに思います。よろしくお願いいたします。

(森岡)*

関西大学の森岡と言います。私は今日、こうした集落の変化や機能、生業と古墳の出現・造営といった議論に非常に関心を抱いて出席し、特にギャラリーで開催している、展示資料の中にもたくさん集落や鉄器ほかの再検証された成果の提示がありまして、大変勉強になりました。本日主に取り上げられた淀川水系から山城という地域は、広く言えば40年から50年ばかり前の考古学の研究においては、646年の改新詔で明示される「畿内」と言う用語がそのまま無批判に使われており、その後もずっと長く使用されておりまして、当時は「畿内南部」と「畿内北部」に分けられた地域性が見込まれたうちの北部に相当する北河内とか東摂津とか山城というまとまりを取り上げられたわけです。その論調が本日の各発表を通して随分大きく歴史的評価も変わってきたという動向を受け取ることができました。私自身の考えの舵取りも変わって来ておりまして、かつて近畿の中部、中・南河内あるいは大和というのを重視して一貫的に発展したとする歴史観が居座り、日本列島の古代国家形成とか大和王権誕生に向けての歩み、成長がわかりよく語られてきましたが、それらの論調は危ないと思うようになりました。弥生時代の中期の終わりから後期、それから古墳時代の初めの時期というところで、大きな歴史像の枠組みの転換というものがですね、やはりありそうで、その点では近江南部まで含めた淀川流域のこの地域こそが解明点になる地域と睨んでいます。本日はその視点できわめて重要な地域のところを詳細な研究活動としてやっておられるというのは一つ大きな評価になる。特にそういうふうに考えた時に、やっぱり青銅器の生産と流通、鉄器の生産と流通ということが鍵を握っているようでして、鉄器については逆に製作地が各所に散在しつつも弥生では遺構が抑えにくい状態とと思っていたのですが、青銅器の方が私など研究していても生産の場というのはなかなか捉えにくい。しかし、モノは確実に増えていって、銅鐸は不明品のなものを含めて600ぐらいはある。正確な地点把握は534点分かるものが現在あるという。ところが全部移動した後の終わった状態、埋納地点を見ているわけですし、生産地と直接結び付くものではない。しかし、近年私を含めて数人の研究者は、やっぱり摂津、淀川水系、山城、近江、美濃、尾張、三河といったベルト的な流れ、要は河内中部や大和を外す大和川水系を外した動きを重視するようになって、色んな証左を得てきています。一方ではちゃんと田中琢さんとか佐原真さんとか、あるいは田辺昭三さん以来の、河内中部・大和そういった大和川水系の大きな発展、それは邪馬台国畿内説に繋がるようなヤマト国、1世紀、2世紀の順調発展を考える研究軸があって、両者は対立しているだけでなく、意外とすれ違いになってしまっていてね、対論になってないのですね。一方は先に大きな歴史的発展の枠組みがあって、古代国家への単系的な路線を考えている。私などは遺物を長い間集落も含めて詳細に見てきた過程で、土器も青銅器も鉄器も

* 森岡秀人氏（関西大学大学院非常勤講師）

石器も見ながら、そうはなかなか見えていないな、と。だから、出てこないものを無理に埋めることは出来ないで、一番大事な1、2世紀のですね、大和も金属器資料としては充実しているように見えるのは弥生ではなく、古墳時代ですよね。前期古墳の莫大な鏡や鉄器、30数基の大型古墳の9割以上の古墳が全部、大和や中・南河内にかたまりますからね、5世紀の段階の金属文物の指標で弥生時代後半期を規定することはできない相談です。今日の話では、5世紀の色々な物資文化とかですね、先進技術の交流の中で一番飛躍点がありましたけれども、これは2世紀あたりの社会とは異なっています。さて、銅鐸生産の分析でも、近畿を北部と南部に分けますと、北部地域の連動が見えてきています。扱われた北河内・三島・乙訓、そして山城は重要で、この研究に更に近江を加えていただくと、より一層それが明確になるのではないかなと思いました。何故かと言いますと、近江の土器はよく知られている受口状の口縁のものがありますが、弥生時代の後期の初頭から在地化が周辺各地で親しみやすく在地化しますから、三島・乙訓以外では丹波、中丹と言われるような地域にも在地化します。北河内にも在地的な形で定着しますし、京都南部も。そうした動きは伊勢湾沿岸にもあって、S字甕と呼んでいる東日本の東海地域の大きな流れの中の土器の出現契機にも関わりますので、近江や東海と言うならば東海ですけど、かなりミックスされたところですね。それらの事象と連絡すると、より一層集落の問題などが解決するところがあるのではないかなと思います。近江の古墳と集落というのも非常に重要だなと思います。そういう点で古川さんの研究なんかも極めて細かく詳細に頭を使いながら、対象は小地域をしっかりと見て古墳と集落の対応で、古墳の被葬者が集落から離れるといけないといった在地集団からの要請がみられるので、逆に集落構造の中に古墳時代様相の出発が遅れて出てくるというのは、良い把握をしているなと思いました。また、真鍋さんがやっておられるような鉄器の諸技術とか工人の交流とかは、韓半島から直接入ってくるような渡来者の定着というのが非常に大きな刺激になっていますので、私なんかは弥生時代を二つに分けて時代名を変えたいなと思っているくらいなので、新石器時代の弥生時代から金属器時代の弥生時代へ、それからより進化した金属器時代の飛躍が中期の古墳時代を示していると思います。そのような発展段階の掴み方を変えると、日本の縄文時代、弥生時代、古墳時代という区分も、大きく見直すべき段階に来ているのではないかと考えます。社会構造の発達史なんかも見直すべきで、それは地域論としても近畿中枢部の一貫性という従来主導した考え方を根本から見直すべきだと思いますので、そういうことへの刺激、示唆をご聴講のみなさんに大変与えたシンポジウムであり、発表成果であったのではないかと講評します。ただ惜しむらく、展示場での遺物は分かり難いと思います。非常に形のいいものがたくさん並んで、甲冑や馬具、あるいは弥生土器の完形品がパーツと並んでいるわけでもない展示ですが、実態として、ああいうものが考古学として緻密に分析されるので、今日のような論点が成り立ってくるというところをですね、ぜひ展示品から読み解きつつ見ていただければ非常に嬉しいなと思います。全然まとめにもならず、コメントにもならなかったのですが、同志社の今回の企画展示と本日の目的に沿った研究集会が大変リンクする有意義なものであったと評価しております。

(若林)

ありがとうございました、森岡さん。最後の展示の意義については、私自身が皆様に申し上げたいことそのまま言っていただいととても嬉しく感じました。では、これで討論の方を終わりにしたいと思います。

(浜中)*

みなさま、どうもありがとうございました。台風22号が近畿の南の方を通過中ですので、展示の方も5時までやってるんですけども、たぶんみなさん恐らく早めに帰られた方がよろしいかと思います。たぶんJRの方は遅延がもう出ている可能性が高いかと思っておりますので。三名の先生方、ならびに会場の皆さん、本当にこの台風の中お付き合いしていただき、当初は人が来ないんじゃないかと中止も考えていた状態だったんですけども、取りあえず何とかできましたので、皆様のおかげです。どうも、ありがとうございました。また、今後ともよろしく願いいたします。

* 浜中邦弘 (同志社大学歴史資料館准教授)